様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６３５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３８５

研究課題名（和文）アメリカン・ルネサンス期の女性の戦略的言説の分析

研究課題名（英文）An Analysis of Women's Strategic Discourses in the American Renaissance

研究代表者
伊藤　淑子（Ito, Yoshiko）

大正大学・文学部・教授

研究者番号：５０２２３２０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期に、アメリカ文学はナショナルな文学ジャンルとしての地盤を確立するが、そのなかで女性の文学的自己表象の言論がどのように形成されたのかを、文学研究と社会改革の連携の可能性を探求する。超絶主義、黒人奴隷制廃止運動、女性参政権運動などに携わった女性たちの言論、女性作家による文学作品、男性主流作家が描く女性像を横断的に検証し、新聞、雑誌などのメディアにも目を配る。精神の自由を謳う超絶主義の時代にあって、権利を制限され、規範的な性役割に束縛される女性たちが、どのように言論の「主体」となろうとしたか、いかなる自己の表象を獲得しえたかについて検証する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
周縁に置かれた者の主体性確立の言説的な戦略を探ることによって、主流文化からの疎外と規範の呪縛を超越する新たなアイデンティティがどのように模索されたのかを明らかにする試みは、性差別にとどまらず、現在もなお残る偏見や差別を乗りこえて主体性の尊厳を獲得するための示唆となろう。現代に立脚し、19世紀の状況を踏まえつつ、20世紀以降の批評理論を用いて、共時的かつ通時的に考察することは、19世紀の限界を現代から批評することが目的ではなく、むしろ現代的視点によってこそ、19世紀の女性たちの言論による挑戦の意義が明らかになると考えるからである。不利を逆転させる言説的戦略は時代を超える普遍性を有すると考える。

研究成果の概要（英文）：During the American Renaissance in the mid-19th century, when American literature established its ground as a national literary genre, women struggled to find their own discourses. The purpose of this research project is to explore how the discourses of women's literary self-representation were formed in this period. The discourses of women involved in transcendentalism, the movement to abolish black slavery, and the women's suffrage movement tell another history of the period of the American Renaissance. Both literary works by women writers and images of women portrayed by male mainstream writers provide clues to understanding women's difficulties in establishing their independence. Examining how women, whose rights were restricted and bound by normative gender roles, attempted to become "subjects" of speech and proclaim freedom gives some suggestions to understand the liberation of the human spirit.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：女性の言説　言説的戦略　アメリカン・ルネサンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

19 世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期の文学については、アメリカにおいても、日本においても、数多くの研究がなされ、また、主要な作家の一次資料は、日記や手紙も含めて編集、出版されているが、女性の言論の形成という視点から、ジャンルを横断する研究が十分に行われてきたとは言えない側面もある。人間を'man'と表記することが慣習的であったアメリカン・ルネサンス期の語法に象徴されるように、近代的自我の構築の外に置かれていることに女性たちは直面せざるをえなかった。人間の意識は言説的な存在であることが論じられるようになった 20 世紀を経た現在の批評的立脚点から、文学、社会改革運動、政治的活動、教育、芸能や社交、メディアを総合的にとらえ、19 世紀アメリカの女性の言論や文学的表象を再検証する。

本研究は、アメリカ・ルネサンスというアメリカ文化の形成期に、女性の文学的自己表象の言論がどのように形成されたのかを追究することを目指す。文学を中心に、社会、政治、教育、ジャーナリズムにおいて発せられた女性たちの声が響き合い、規範的女性像を脱構築しながら、どのように女性の言説形成に蓄積されていったのかを問う。たしかにアメリカ文学史の書き直しはさかんに行われ、白人男性作家に傾斜した文学史から排除されていた女性作家たちの作品の再評価が進んでいる。Nina Baym の *Woman's Fiction* の初版が 1978 年に出版されたことは、アメリカ文学史のキャノンを読み直す画期的な契機であり、1993 年に出された第二版の序文に、Baym 自身が隔世の感があると記すほどである。またアメリカにおける社会改革の研究は、黒人奴隷制廃止運動と女性参政権運動との関連性を明らかにしている。19 世紀のメディアの発達に注目する研究も進み、女性作家による大衆小説や雑誌記事の文化的意義が明らかにされつつある。19 世紀に出された子どもに道徳規範を教えるコンダクトブック、あるいは家事や育児の手引書の多くが復刻出版され、文化的意義を見直されている。しかしアメリカン・ルネサンス期の言説の系譜が男性中心主義に基づくものであり、その伝統が容易に覆るものではないことも Phyllis Cole や Charlene Avallone などによって指摘されている。宗主国であったイギリスからの独立を遂げ、文化的な独自性を謳い、ヨーロッパ的伝統からの解放と自由を求める思潮が広まるアメリカにおいて、性の属性による制約を受けながら、女性たちがどのように主体性を求めたかを探る。

２．研究の目的

本研究はアメリカン・ルネサンス期を女性の主体構築という視点から新たに分析することを目的とする。同時代に起こった言説的現象を分野越境的に分析し、現代批評理論を用いてその意義を問い直し、フェミニズム批評の今日的有効性を探る。

本研究が目指すのは、19 世紀中葉にアメリカ文学がナショナルな文学ジャンルとしての地盤を確立するなかで、女性の自己表象の言論が、規範的女性像を超えて、どのように形成されたかを多角的に追究することである。当時の政治的事情、社会的現実、国際的状況を踏まえ、批評理論としてのフェミニズムを応用し、クイア批評の視点も取り入れて、文学作品や社会評論、あるいは女性参政権運動や奴隷制廃止運動などにおける意見表明、定期刊行物や新聞などの記事を検証し、文学研究と社会改革をつなぐ新たな可能性を探りながら、既成の規範の脱構築と新たなアイデンティティを形成する言説の構築または再構築の過程を探る。女性であることによって周縁に置かれた者の主体性確立の言説的な戦略を探ることによって、主流文化からの疎外と規範の呪縛を超越する新たなアイデンティティがどのように模索されたのかを明らかにしたい。現代に立脚し、19 世紀の状況を踏まえつつ、20 世紀以降の批評理論を用いて、共時的視点と通時的視点による考察を目指しているが、19 世紀の限界を現代から批評することが本研究の目的ではない。むしろ現代的視点によってこそ、19 世紀の女性たちの言論による挑戦の意義が明らかになると考える。分野を横断する分析により、不利を逆転させる表現や論理など、周縁から声を発するための言説的戦略を総合的に論じることを目的とする。

３．研究の方法

以下の方法で研究を進めた。
①娯楽的文化から生まれた女性像と女性の言説形成の関わりと文化的意義を明らかにする。俗的で大衆的な文化からの言説的作用について検証するために、雑誌や新聞などに掲載された記事や文学作品を分析する。
②アメリカン・ルネサンスという呼称を 19 世紀中葉の文学的な現象を指すことばとして定着させたのは、1941 年に出版された F. O. Matthiessen の *American Renaissance* であるが、超絶主義をピューリタニズムの系譜として論じた Matthiessen に対して、酒本雅之は Poe も加えた独

自の視点を示し（『アメリカン・ルネサンスの作家たち』1974)、1988年にはD. S. Reynoldsが *Beneath the American Renaissance* を著し、俗的な文化からの影響がいかに強く働いていたかを論じている。またPhyllis Coleは超絶主義に対する女性の影響を日記や手紙から論証する論文や著作を発表し、2014年には *Toward Genealogy of Transcendentalism* を編集している。これらの研究やJoel Myersonなどの書誌情報をもとに、アメリカン・ルネサンスがどのような時代として論じられてきたかを確かめる。
③現代批評理論をジェンダー、主体（サブジェクト)、行為主体（エージェンシー)、アイデンティティ、記憶などをキーワードとして応用する。超絶主義の内部でどのような女性の主体性の構築が可能であったか、現代的な視点から分析するための研究の枠組みを作る。
④公的に言論活動に携わった女性のみならず、著名な思想家の家族として私的空間で影響を与えた女性も含め、超絶主義の内部にいた女性たちがどのように言説的主体性を求めたのかを検証する。
⑤改革運動が唱える理想的な社会において、ジェンダーがどのように規定され、そこにどのような女性の主体が言説的に想定されていたのかを明らかにする。
⑥奴隷をめぐる言論が女性の言説的主体構築に与えた影響を、新聞、雑誌記事にも射程を広げて明らかにする。あまり注目されてこなかった超絶主義的言説との関わりも明らかにする。

４．研究成果

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、研究成果の発表は計画どおりに進まないことが多かったものの、資料の収集と分析に励むことはできた。研究期間の終了後にも、本研究の成果を含めた研究成果の公表に引き続き努めたい。

本研究の成果として、これまでにMargaret Fullerに関するテーマを中心に公表してきた。“Looking for Transpacific Genealogy in Early Feminism: A Study on the Analogy between Margaret Fuller and Ume Tsuda”と題して、アメリカのデンバーで開催されたSSAWW (Society for the Study of American Women Writers)において2018年に発表したことが本研究における学会発表の端緒となった。つづいて同年に「女性にとってのアメリカン・ルネサンス：Caroline Wells Healey Dall, Transcendentalism in New Englandを中心に」と題する発表を日本アメリカ文学会東京支部で行い、2019年には比較文学の視点も加えて“Women’s College in Girls’ Literature as a Sphere of Initiation for Independence and Socialization: Comparative Reading of Jean Webster and Nobuko Yoshiya.”と題する発表をマカオで開催されたInternational Comparative Literature Associationの大会で行った。コロナ禍で対面での研究会の開催が困難であった期間をはさんで、2022年12月には「超絶主義を超絶するフラーのキャリア」と題して、日本アメリカ文学会東京支部のシンポジウムで発表を行った。さらに、2023年に「Caroline Sturgisとトランセンデンタリズム」と題して、日本ナサニエル・ホーソーン協会東京支部で2023年2月に研究成果を発表した。

また、2019年にシンポジウムで発表した内容を“Feminist Strategies for the Achievement of Economic Independence: *Woman in the Nineteenth Century* (1845) and *Women and Economics* (1898)”と題して日本ナサニエル・ホーソーン協会の機関誌 *NHSJ Newsletter* No. 38, 2020に発表した。2021年には日本女性学会の学会誌『女性学』の特集記事を企画し、有賀夏紀らとともに、「権利へのストラグル――アメリカ女性参政権100周年に寄せて」(『女性学』29号 2021年）を掲載した。

図書としては『19世紀アメリカ作家たちとエコノミー ――国家・家庭・親密な圏域』を共編著し、彩流社から2023年に出版した。Megan Marshallによる伝記 *Margaret Fuller: A New American Life* の翻訳も本研究の成果であるが、校正を終え、2023年度中に出版の見込みである。研究期間内に公表することのできなかったアメリカン・ルネサンス期の女性作家に関する研究成果は、今後発表していく計画である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 伊藤淑子	４．巻 28
２．論文標題 権利へのストラグルーーアメリカ女性参政権100周年に寄せて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 女性学	６．最初と最後の頁 123 151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

１．著者名 Yoshiko Ito	４．巻 38
２．論文標題 “Feminist Strategies for the Achievement of Economic Independence: Woman in the Nineteenth Century (1845) and Women and Economics (1898).”	５．発行年 2020年
３．雑誌名 NHSJ Newsletter	６．最初と最後の頁 11-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

１．著者名 伊藤淑子	４．巻 104
２．論文標題 Looking for Transpacific Genealogy in Early Feminism: A Study on the Analogy between Margaret Fuller and Ume Tsuda	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大正大学研究紀要	６．最初と最後の頁 112-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　4件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 伊藤淑子
２．発表標題 フラーからギルマンへ――19 世紀の女性と経済
３．学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤淑子
２．発表標題 Women ’ s College in Girls ’ Literature as a Sphere of Initiation for Independence and Socialization: Comparative Reading of Jean Webster and Nobuko Yoshiya
３．学会等名 International Comparative Literature Association（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤淑子
２．発表標題 Silent Voice of Female Protagonists in Naoko Uehashi ’ s Moribito and The Beast Player
３．学会等名 International Research Society for Children's Literature (IRSCL)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤淑子
２．発表標題 Looking for Transpacific Genealogy in Early Feminism: A Study on the Analogy between Margaret Fuller and Ume Tsuda
３．学会等名 SSAWW(Society for the Study of American Women Writers)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊藤淑子
２．発表標題 女性にとってのアメリカン・ルネサンス：Caroline Wells Healey Dall, Transcendentalism in New Englandを中心に
３．学会等名 日本アメリカ文学会東京支部（招待講演）
４．発表年 2019年

1．発表者名 伊藤淑子
2．発表標題 超絶主義を超絶するフラーのキャリア
3．学会等名 日本アメリカ文学会東京支部（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 伊藤淑子
2．発表標題 Caroline Sturgisとトランセンデンタリズム
3．学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会東京支部（招待講演）
4．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

1．著者名 伊藤淑子	4．発行年 2023年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 288
3．書名 19世紀アメリカ作家たちとエコノミー　――国家・家庭・親密な圏域	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関